

エッセイ 台湾研究を始めるということ

東寧会青年部のころ 1973～75年

春山 明哲

「台湾近現代史研究会の思い出」という題名で講演したのは2002年8月のことである。そこで私が語ったのは、1978年から1987年まで存続した「台湾近現代史研究会」を中心に、その前身である1970年頃発足した「東寧会」、1975年から開始された「後藤新平研究会」の活動の概要である。その講演記録は拙著『近代日本と台湾—霧社事件・植民地統治政策の研究』（藤原書店、2008）に収録され、中国語にも翻訳されている（『跨界的台湾史研究』（若林正文・呉密察主編、播種者文化有限公司、2004））。

ここでは「台湾研究を始めるということ」という「お題」を頂いたので、私が東寧会に参加した1973年から75年までの3年間の「台湾史研究事始め」の思い出の二つ三つを書いてみたい。当時の研究ノートという聞こえがよいが、雑記帳の類が残っていたので、それを参照しながらの記述になる。

東寧会での共同研究のテーマ「霧社事件」で最初に私が担当したのが、詳細な年譜を作成することだった。歴史研究において資料の重要性は論をまたないが、あとから考えると1973年は霧社事件研究のインフラ構築ともいうべき年で、その立役者は河原功氏であった。河原氏は2016年に『台湾渡航記—霧社事件調査から台湾文学研究へ』を村里社から出版されている。本書は氏が1969年にはじめて台湾を訪問したときから、第4回の1973年夏までの台湾滞在の記録で、当時の日記・備忘録の翻刻と現在の解説を付したものである。その第3回渡航記の1973年3月10日の備忘録にこうある。「筆写本『霧社事件誌』（楊仲鯨）、呉濁流『アジアの孤児』を見つけたのが収穫」。さりげない記述だが、翌3月11日には「朝寝坊。夕べ『霧社事件誌』を読み耽ったため」、さらに12日「またしても朝寝坊。『霧社事件誌』を読んだため」とあるのが、さもありませんと思わせる。10日の解説には「『霧社事件誌』を見つけたのはものすごいヒットでした。原本は総督府の警務局が書いた秘文書で、それを楊仲鯨（行政官）が筆写したものです」とあり、さらには本書の附録として「台湾資料の発掘と復刻（その一）」（311～313ページ）に、『霧社事件誌』にまつわるエピソードが詳しく記されている。

この『霧社事件誌』は台湾総督府警務局の作成になる534ページの大部な報告書であり、のちに『台湾霧社蜂起事件—研究と資料』（社会思想社、1981）に翻刻収録した。私が戴國輝さんの勧めで東寧会に参加し、その「青年部」のメンバーとして活動を始めた時期は、まさに河原氏が台湾から根本史料を収集してきた時期だったのである。そして、私は「日誌」作成のために、河原氏の自宅に通い、彼の書斎で『霧社事件誌』を読み進めたのである。

もうひとつ記さねばならないのは、筆写本を作った楊仲鯨のことである。楊仲鯨は、河原氏に

よれば『台湾人士鑑』にも載っている日本統治時代からの名士で、行政長官公署民政処などを経て1950年には花蓮県長に当選している人物である。実はこの楊仲鯨は、私の父方の祖父の妹の夫で「花蓮港のおじ」と呼ばれていた人である。先年、従兄弟と高雄の薛家旧宅を訪ねたときに、楊仲鯨の写真を見たことがある。この旧宅は典型的な閩南式三合院の伝統建築として、薛家古厝の指定を受けている。高雄市文献委員会が発行した『高雄史蹟賞析』（民国98年）には、蝶ネクタイにステッキというハイカラな楊仲鯨とその夫人、祖父母など一族の大集合写真が掲載されている。

それにしても、楊仲鯨が『霧社事件誌』を筆写した事情はどのようなものであったのか、そしてなにより台湾総督府警務局が単なる警察報告にとどまらない、あのような「歴史叙述」をなぜ作成したのか、問いたい気分がある。

雑誌『台湾近現代史研究』の創刊は1978年で、1988年の第6号まで刊行できた。当初、3号雑誌にはしない、という目標があった。というのは、出版費用の半分は我々の「手弁当」で、大方は各自のアルバイト代を充てた。創刊されたのは1978年だが、自分達の手で研究の発表の場を作りたいという希望は、早くからあった。

1973年7月15日のメモによると、前日の14日「河原宅にて会合」とあり、河原功、若林正文、松永正義、宇野利玄、松田とある。正文の「丈」には、「ひろ」とルビが振ってあり、松田さんは姓のみ、松田はるひさんという名前を知らなかったと見える。この日の報告は、河原氏の「楊貴氏略年表草案について」、「河原、若林両氏は訪台し、楊氏にインタビューを試みている。河原氏には「楊貴伝」の類の伝記作成を望む。楊貴氏は台湾をめぐる歴史の大きな糸であろう。それに〈伝記〉のジャンルは日本では不十分であるから、試みる価値あり」などとコメントしているが、台湾文学の門外漢である私ではなく、出席者の誰か、たぶん松永氏の意見であろう。

「〈雑誌〉の創刊について」が議事で、「目下の所〈ヤング東寧会〉最大の課題である。会全体で討論するのはこれが2回目である」として私なりの論点整理を試みている。項目だけ並べると「何故〈雑誌〉を出すか」という点に関して、記録性、表現の場、批判機能、研究の手掛かり、執筆活動、日本・朝鮮・中国近代史へのアプローチ（歴史・文学・植民地・etc）とあり、私の注記として「並列的にすると骨格がよくわからないが、会員の研究活動がある程度まで熟成してきたのであろう。つまり〈気運〉である」として、以下、「蓄積」、「批評」、「志向」の三つの視点から、どのような雑誌にするかの検討を行っている。そして、雑誌の編集・発行等の「雑用」面を当分担当とある。注記として、1972年11月に松本清張が創刊した『季刊現代史』がメモされている。先行モデルとしたものだろうか。

「気運」はさらに盛り上がる。「東寧会若手の部」の会合が1973年7月26日に本郷「明日香」で持たれた。この日は「雑誌「台湾研究」（仮称）について」が議題で、「巻頭言」の文案を持ち寄った。私は各人の案を〈主知派〉、〈歴史主義派〉などと勝手に分類しているが、この日は統一できず、ひとまず私が文案を預かることになった。私の文案の出だしはこうなっている。「知ることと考えることとは、偶然という手に導かれることがしばしばであるにしても、到る所発端であるような道程を歩むわたし達の生の方法に他ならない。（行換え）1895年から1945年まで、

台湾は日本統治下の植民地であった。(以下略)今見ると随分調子が高いが、私の意図はまず「一般的・哲学的背景」を置き、ついで歴史研究の方向を示す、というところにあっただらう。わたし達の共通点は、若林氏の定式化によれば「台湾を正当な歴史研究の対象」にする、ということであり、松永氏の表現では「台湾についての研究の欠落そのものが、わたしたちをここに立たしめている歴史と深く関わるもの」だということにあった。

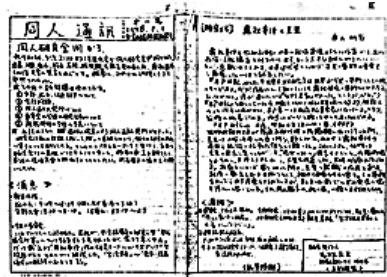
この日の会合では、「巻頭言」はひとまず置き、雑誌の創刊号に掲載したい、できるかも知れないテーマを各自出してみることにした。その後の研究履歴と比較すると興味深いものもあるが、私が出したテーマは「大正デモクラシーと植民地問題 台湾出身の日本留学生 1918～1927の歴史(共産主義運動以前)」となっている。

最後に、今にいたる私の研究を方向づけた「事始め」を点描しておこう。

1974年10月13日、河原宅における『霧社事件誌』の最終読み合わせをした上で、11月22日の例会で「霧社事件日誌」草稿の最後の発表を行った。このとき「またしても戴さんが、論文を書くよう勧めた。テーマは植民地と中央政局の関係」、私のほうも「実の所、日誌を作っていて視野の中に浜口、幣原、宇垣、松田らが登場してくるにつれ、昭和初期の日本の状況が動き出すのを感じていた」。このとき「植民地統治と政治過程」の研究方法論とまず取り組むことになったのである。翌1975年1月27日の備忘録には、「第59帝国議会の議事速記録を読むことにとりかかって、あと衆議院予算委員会を残すのみとなった。その間、テツオ・ナジタの『原敬』、伊藤隆の『昭和初期政治史研究』、三谷太一郎らの『近代日本の政治指導』、加藤政之助の『立憲民政党史』などを読み、自分自身の研究の構想に成熟させる自信のようなものが、次第に出来つつあると感ずるようになった」と書いている。

これらの書のうち、『原敬』はのちに若林氏との共著に収めた「近代日本の植民地統治と原敬」の出発点になった思い出深い本である。また、伊藤隆先生には、当時工学研究科の大学院生であった私が唯一「正規」の歴史の授業の聴講とゼミにも参加させていただいた。『歴史と私』(中公新書)によると伊藤さんが都立大学から東大文学部国史研究室の助教授に就任されたのは1971年で、1973年度から「大正政治史の諸問題」を講じられていた。伊藤さんとは私が国立国会図書館に入ったことから、憲政資料室顧問としても身近な存在であり、2007年私の定年退職前の大仕事『新編靖国神社問題資料集』の編纂にも多大なご協力をいただくという「縁」が続いている。

写真は、1975年8月1日発行の『同人通訊』第1号で、右ページに「霧社事件と天皇」という私の研究メモが載っている。『木戸日記』昭和6年1月20日の条にある昭和天皇の発言について記したものだが、私の研究の未熟さを痛感したものであり、同時に「到る所発端であるような道程を歩む」わたしの生の方法を刻印したものとして、懐かしい。



(2020年4月14日記)